

令和6(2024)年度 第66回卒業式式辞

駒場東邦高等学校第66回生諸君、ご卒業おめでとうございます。

保護者ならびにご家族の皆さまには、ご子息の晴れの門出にあたり、お喜びも一入のことと拝察いたします。心よりお祝いを申し上げます。

「卒業」とは、紛うかたなく大切な節目の時です。卒業生諸君をはじめここに集った皆さまが、これまで共に過ごしてきた時間を振り返りつつ、卒業生諸君のこの先の人生行路について思いを馳せるとき、この式の間は深い感慨に満たされることでありましょう。その感慨の深さを互いに確かめ合いながら、この大切な卒業式を進めてまいりたいと思います。

66回生諸君は、本校に入学して1年が経過し、いよいよ後輩ができるというタイミングで、長いコロナ禍に見舞われました。いつまで続くのかまったく見通しのつかない行動制限の中で、学校行事や各部の活動においては、そのほとんどが本来の形で実施できない事態となりました。中一の1年間で初めて触れた駒東生のスピリットを、さあ自分たちも発揮していこうというその矢先に、張り切る心が削がれてしまった格好でした。授業を中心とした学習活動においても、学友たちとの対話を通じて学ぶことがゆるされなくなりました。みずみずしい感性の直接のぶつかり合いから生まれる気づきが得られないなかでの学びは、孤独で、不安の大きなものであったと思います。さらに、この苦しい状況は、それを自分ごととして受け止めるように促しながら、実は、聞き分けの良さを強く求めてくるものでした。そこでは、一見互いの絆を確かめ合う優しさをもつようであり、その陰に個人を追い詰める暗い動機をもっているというようなケースも少なからず見られ、社会問題にもなりました。振り返れば、一人一人の心が常に圧迫感に苛まれているような期間でした。

それでも、ようやくこの災禍を脱しようかというところに学校の活動を中心となって進めていく立場にさしかかった66回生諸君は、駒場東邦が本来の豊かな学びを取り戻していくことに大きく貢献してくれました。それを必死で受け継いできた先輩諸氏によるメッセージはあったにせよ、〈本来の形〉を実感をもって示す先達が側にいないなかでのトライアルは、やはりとても難しいものであったことでしょう。そこで、諸君が示してくれたのは、〈継承〉とは、新たなものを生み出すエネルギーにより為されるものであるということでした。それは、4年ぶりにすべての制限を撤廃して実施した文化祭にかける諸君の心構えに象徴的に表されていたと思います。その意味で、文化祭パンフレットに掲載された実行委員長・副委員長の言葉は非常に印象的でした。中一の頃にコロナ前の文化祭を経験した者として担うべき責任を意識しつつも、新たなステージへのステップアップの意志をはっきりと打ち出したその言葉のとおり、新たな挑戦いっぱいの実践であったと思っています。体育祭も、諸君が自分で考え、新たに切り拓いていく姿勢を貫いたものであったと思います。知恵を出し合いながら新競技を作りだしていく過程には、非常に感銘を受けました。その他あらゆる活動において、外連味なく真正面から取り組んだ諸君のエネルギーは、伝統の継承とは新たに挑み続けることに他ならないということ、後進に明示するものでありました。それは、駒場東邦の伝統を体現しつつ、新たな歴史を刻んでゆく原動力となるものであると確信します。

本校初代校長の菊地龍道先生が、校長就任にあたって述べたのは、先の戦争の影響から脱却し切れていない状況において、若い生徒諸君には、事大主義に流されることなく自らの夢を世界に描いてほしい、ということでした。それはすなわち、本校における学びは、本物に触れて、自らの感受性をもって現象を捉え、独立した個人として自由に考察を深めていくこと、そして、あらゆる分野に対して正面から向き合い、堅実に積み重ねていくことを旨とする、と宣言したものです。66回生諸君の取り組みは、まさに駒場東邦が創立当初から若い学習者に期待する姿そのものであった、と感じています。

難しい局面から、新たなものを生み出すエネルギーをについて述べてきましたが、このことに関連して、農業生産法人 GRA を立ち上げた岩佐大輝氏の取り組みに興味を引かれたので、紹介したいと思います。一粒 1,000 円の『ミガキイチゴ』で話題になった若きイチゴ農家および起業家です。岩佐氏は、東日本大震災で壊滅的な打撃を被った郷

里の宮城県山元町にUターンして起業し、名産のイチゴを見事に復活させたのですが、そのキーワードは「IT農業」でした。昨秋のあるラジオ番組に出演した岩佐氏は、自らの就農の動機を次のように語りました。すなわち、地元のベテラン農家の方にその知恵について尋ねると、「イチゴに聞け」と言われるが、それではいかにも心許ないので、ITによって確実なものにしたい、ということです。それに対して私は、疑問を感じずにはいられませんでした。ITによって効率化してしまえば、自然からのメッセージを聴き取る感受性が失われてしまうのではないか、それはひとたび失われれば取り戻すのは難しいものなのではないか、と思ったのです。それでも、その番組での岩佐氏の語りは澁刺として魅力的だったので、気になって、彼の紹介やインタビューの記事を追ってみました。彼が執筆した新規就農のための著作も手に取ってみました。そこに私は、岩佐氏の新たなものを生み出すエネルギーを見出すことになったのです。

岩佐氏は、単に地元が経済的に潤うことを目指したのではなく、宮城県内でも特に高齢化率の高いこの地域に、若者を呼び込み活気を蘇らせようと考えていたのです。まずは、若者の就農を促すために、「イチゴに聞く」ことで長い年月をかけて得ていた栽培に関する知恵を、ITを駆使して短期間で習得できるようにしました。そしてさらに、自社の社員たちに、ワークスタイルばかりでなく、ライフスタイルもあわせて新たなものを提案することを企図し、経営者としての多忙な日々を縫って、たとえば、自ら地元の海でサーフィンや釣りを楽しむ時間を、あえて確保したりしたのだそうです。生活を楽しむことは、地域における人々の交流を有機的なものにします。その交流は、風土への理解を深めることにつながっていきます。結果として、風土に根ざした成熟した知恵を先達から得ることもできるようになり、ITによる学習をより確固たるものとするに成功したのです。つまり、いわゆる「IT農業」の新たな挑戦は、「イチゴに聞け」という言葉に象徴される、伝統的な自然からのメッセージを受け取る方法を、受け継ぐためのものだったのです。

岩佐氏は、自らに挑戦を促したエネルギーは、東日本大震災による危機的な状況にあったと振り返ります。そのイレギュラーな状況が、長年のしがらみによって固定化した世界観に風穴を開けて流動性を作りだし、新規の参入を助けたというのです。平時においても、新規参入者にとって敷居の高い状態にならないようさらなる工夫が、岩佐氏の次なる課題であるようです。

目を転ずれば、すぐ隣に災害の爪痕に苛まれる地域があり、世界には終わりの見えない紛争に苦しむ地域があります。そのような状況において、強い言説がますます幅をきかせつつあるように感じます。それでも、一隅を照らす視点をもって世界に相對して、風土が育んだ知恵に光を当てつつ、新たな時代を切り拓いていこうとするエネルギーが、待望されています。66回生諸君が、駒場東邦における堅実な学びを通して獲得した方法論をもって、その期待に応え、世界の平和や人類の福祉に貢献する仕事に活躍する姿を、ここに確信するものです。

最後になりましたが、これまでご子息方を慈しみ育てていらっしゃる保護者の皆さまへ、重ねて心からのお祝いを申し上げますとともに、この六年間に賜りました本校教育活動への並々ならぬご理解とご協力に、改めて厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

66回生諸君の大いなるご活躍を、共に楽しみにしていきたいものです。

以上をもちまして、駒場東邦第66回卒業式の式辞といたします。

令和7（2025）年3月7日

駒場東邦中学校・高等学校
校長 小家 一彦